【助成 39－49】

マタギの知と技術の継承に関する社会学的研究

研究者　東北大学教育学部　准教授　　鷲谷　洋輔

〔研究の概要〕

本研究は、現代的な文脈においてマタギの知と技術はいかに継承されるかを問いとした。秋田県湯沢市南部の S 氏を対象とする徒弟的なエスノグラフィーを通じ、そこに見られる旅マタギの系譜とからだでの学びを強調する継承形式が観察された。さらに、マタギによる継承のプロセスは、自らの経験に依ること、積極的な教示よりも最低限の安全確保の指示が優位であることが明らかになった。これらをふまえ、知識と経験を重ねつつも、常に変化に開かれたかたちで継承がなされること、そこでは自然環境、人間社会、マタギ自身を含めた事象が可変的にとらえられていることが示された。同時にマタギの知もまた動的な対象として探究する視角が提示された。

本研究の問い

現代的な文脈において、マタギの知と技術はいかに継承されるのか。この問いを本研究の出発点とした。これまで、マタギは伝統的な狩猟採集の実践者としてだけでなく、その独特な習俗も含めて多様な関心を集めてきている。学術的には、主として民俗学的な見地からの蓄積がある（たとえば田口　1994、佐藤ら 2004）。その一方で、気候変動や過疎化など、マタギもまた影響を受けている現代的なコンテクストに即した検証は限定的である。野生動物と人間の交錯が社会問題となっている昨今において、「自然と人間との調整役としてのマタギ」に学ぶ学術的・社会的意義は小さくない。

以上をふまえ、本研究は現在のマタギを取り巻く現状を整理し、マタギの知の継承に焦点を当てた。「マタギはいかなる知識を持つか」という体系的な記録以上に、そういった知識がいかに編み上げられ、伝えられていくのかを現在進行形でとらえる試みである。

対象と方法

これまでフィールドワークを続けてきた秋田県湯沢市南部のマタギであるＳ氏を対象とした。さらに、調査者自らが見習いとして弟子入りし、参与観察を行う徒弟的エスノグラフィーを行った。調査は 2022 年の 1 月からおよそ週に 1 度の現地調査を継続した。フィールドでの観察、聞き取りによるデータを整理・検討することで得られたのが以下の考察である。

考察

1．旅マタギの系譜と単独狩猟

フィールドワークの現場において、調査者は「二番弟子」「最後の弟子」として言及されるようになったことなどからも、本調査が徒弟的な関係性の中で進んでいることが示されるだろう。銃を譲り受け、猟に帯同するだけでなく、銃の構え方や道具の手入れ、猟場での位置取りから獲物の調理方法などに至るまでの知識とスキルとが、明示的に、そして丁寧に伝えられて

いる。マタギに関する研究の多くが指摘してきた独特なことばの運用や通過儀礼はほとんどない。おそらくS 氏らがいわゆる旅マタギの系譜に位置づくことがその背景にある。S 氏自身が語るように、当該地域のマタギ集団の始まりは、より北部に位置する地域のマタギ（通称「阿仁マタギ）」の一部が単独、あるいはごく少数で逗留したことに起因している。その折にマタギの技術とマタギとしての経脈とが引き継がれたと推測される。阿仁マタギにみられるような集団での狩猟ではなく、単独あるいは少数で行う形態が当地で継承されているのも、その経緯を反映していると思われる。

2. 自らの体を通じて学ぶ

うちの先祖に教えたのは、月山とか山形の山を専門に歩いてたんだな。そういう人たちの伝達のしかたって、自分で実感して体験して語るから、違うんだよな。

旅マタギの系譜に位置づくということは、教科書的な情報ではなく、「自らのからだを通じて学ぶこと」の重要性にも通じている。ここでは、＜自らに依る＞ということと、＜からだで学ぶ＞ということの二つの側面が重要になる。

S 氏が教えるしかたは、明示的な説明（情報）と、大まかな動きの修正を促すこととに大別できる。山菜の見分け方やランドマークの説明は前者、きのこの採り方や猟銃の扱いは後者の例である。前者については、S 氏自身がマタギとなり、経験を得た過程そのものが徒弟的な指導ではなく、自身による探究に大きく依存していたことが背景にある。たとえばS氏の父方にマタギの系譜が認められる一方で、大型の動物を対象にするような今日知られるマタギの狩猟実践はほとんどなされていなかったという。S 氏にとって、山とのかかわりは自らが知る山の境界を一人で拡げていく営みであり、若くして家長となった環境において手の届くしかたで家族を養う限られた選択肢であったという事情もある。「自分でできることを自分で拡げていく」という構えが、自らに依って立つマタギとしての習熟につながっている。この点は、旅マタギが単独ないし少数で猟場を開拓した経緯にも重なっている。

一方後者の特徴は、しないこと（禁止）が強調される点である。多くの場合、それは危険の抑止（安全の確保）が求められる場面で生じる。反対に、動きや動作を積極的に促す教示（たとえば「こちらの道を歩いたほうがよい」というようなコーチング的声掛け）は極めて少ない。これらは、最低限度として安全確保が念頭にあることを示唆しているが、そこにはまずは自らが動き体験することに任せるという、自らのからだで覚えることへの信頼がみられる。習い覚えるべき型を予め示すよりも、為すべきではない事柄を示すことで、為すべき大まかな方向性を示すものである。

3. 可変性とその継承へ

S 氏にとって、変わり続ける環境の前では、教科書的な情報や過去の経験則は現状を把握する足掛かりに過ぎない。ここでいう環境とは、自然と人間社会との双方も、さらには老いと向き合うS氏自身も含みこむような、可変的で重層的なものである。これらを踏まえると、マタギの知と技術とは自然との関係性においてこそ成り立つものであり、不変の伝統ではなく、常に変化に開かれたものとしてとらえられる。とすれば、マタギの知に迫る試みには、マタギそのものも変化の只中にある対象としてとらえ直すことが求められるだろう。知識や経験を足掛かりにしつつ、いかにマタギは変わり続けているのか。その可変的で動的な実践が、マタギの知をめぐる今後の具体的な課題となる。

発表論文　未発表